全摘しても、確実に声を取り戻す治療法が広まる

喉頭がん

こうとうがん

今年2月に音楽プロデューサーのつんく♂さんが診断を受けた喉頭がん（のどのがん）。進行して見つかると喉頭を摘出して、声を失うことになる。しかし、〝声か命か〟の選択を迫られる状況から、〝声も命も〟失わずにすむ治療法が普及しつつある。

兵庫県在住の戸川雄平さん（仮名・66歳）は、2010年、声のかすれとのどの違和感があったため、近所の耳鼻咽喉科を受診した。ファイバースコープでの検査などにより、喉頭がんの疑いがあると言われ、地元の総合病院を紹介された。

喉頭がんは、声帯を含むのどぼとけにできるがんだ。患者の9割は喫煙者で、多量の飲酒も関係する。ミュージシャンの忌野清志郎さん、落語家の立川談志さんなどがこのがんで亡くなり、最近では音楽プロデューサーのつんく♂さんが治療を続けている。

喉頭は、気管と食道が分かれる部位にあり、呼吸と発声に関わる器官だ。食べ物をのみ込むときには気管に蓋をし、飲食物が入るのを防ぐ役割も果たしている。

戸川さんは、紹介された地元の総合病院での検査で、喉頭がんの一種で左側の声帯にできた声門がんと診断された。早期の場合は手術以外に、放射線治療が可能で、内視鏡によるレーザー治療が選択されることもある。戸川さんは、放射線治療を受け、無事に根治したと思っていた。ところが、翌年同じ部位に再発が見つかり、主治医からは喉頭全摘出手術を勧められた。

声帯の一部を切除し手術後も声を残す

しかし、喉頭を摘出すると声を失うため、戸川さんはなんとか喉頭を残す方法はないかと、最初の耳鼻咽喉科で相談した。医師から紹介を受けて、喉頭がんの症例が豊富な神戸大学病院を訪れた。

神戸大学病院
耳鼻咽喉・頭頸部外科講師
齋藤（さいとう） 幹（みき）医師

同院耳鼻咽喉・頭頸部外科の齋藤幹医師は、戸川さんの病状から「喉頭垂直部分切除術」を選択できると診断し、11年8月、この手術を実施した。喉頭垂直部分切除術とは、声帯を取り囲む軟骨を切り開き、がんが広がった声帯の一部と周囲の組織を切除する手術だ。

「声帯を残すことができるため声を失わないですみ、食べ物が過って気管に入ってしまう嚥下（えんげ）障害も極力防げます」（齋藤医師）

戸川さんは、その後3年間、定期的に経過観察を続けているが、再発することなく、普通に話し、日常生活を送っている。

戸川さんのように声を失わずにすむ手術には、喉頭をすべて切除するのではなく4分の1を残す喉頭亜全（あぜん）摘（てき）術もある。

がん研有明病院
頭頸科副医長
福島（ふくしま）啓文（ひろふみ）医師

「喉頭を温存できる点では、患者さんにとっていい術式です。ただし、この手術は、9割程度声帯を取ることもあり、声帯が残っても声質はかなり変わってしまいます。後遺症で嚥下障害を伴うことも多いのです。さらに喉頭を残せば、がんが再発する恐れもあるため、腫瘍の部位や進行度、患者さんの年齢、身体状況、生活環境などさまざまな要因を十分に考慮し、慎重に適応する必要があります」（同）

再発や嚥下障害が起こるリスクを回避するには、喉頭をすべて摘出する必要がある。昨今では、喉頭を全摘しても声を失わない治療の確立が進んでいる。

東京都在住の会社員、三橋芳郎さん（仮名・64歳）は03年、声のかすれが気になり、都内の大学病院を受

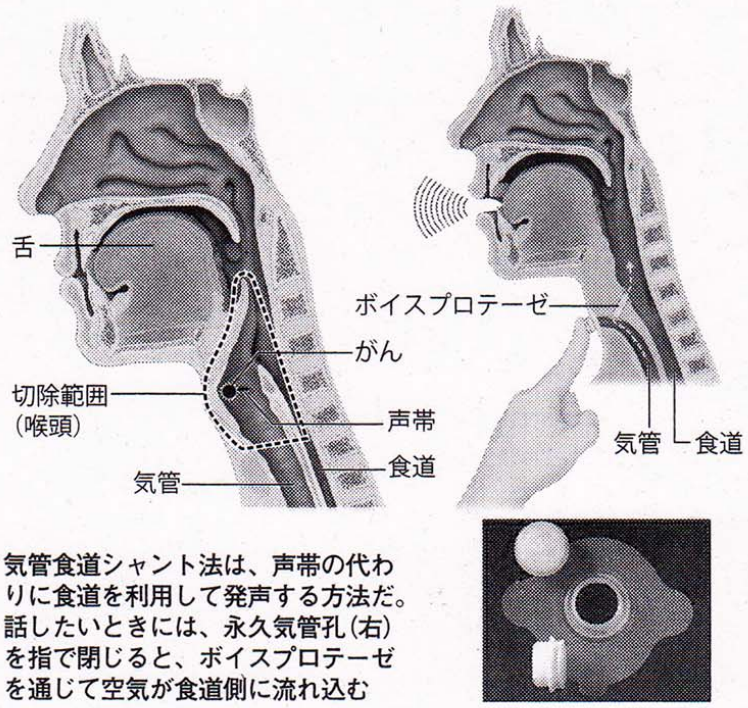
神戸大学病院　神戸市中央区楠町7－5－2　☎078－382－5111
がん研有明病院　東京都江東区有明3－8－31　☎03－3520－0111

診したところ、初期の喉頭がんと診断された。ごく早期であったため、放射線治療を受けた。すぐに仕事へも復帰でき、日常生活に支障をきたすこともなかった。ところが2年半後、検査で再発が見つかった。三橋さんは車販売の営業という仕事をしていたため、声を失うことは避けたかった。

そこで、喉頭がんの症例が多いがん研有明病院で、治療について相談することにした。同院頭頸科の福島啓文医師の診断により、がんは声帯のなかに限られていたため、「喉頭垂直部分切除術」がおこなわれ、声を失わずにすんだ。ところが、さらに7カ月後、また再発してしまい、06年末に喉頭全摘術をせざるを得ない状況になった。

三橋さんは気を落としたが、手術前に主治医の福島医師から、喉頭を摘出しても、声を取り戻せる「気管食道シャント法」という手術があるという説明を受けていた。さらに福島医師がこの手術の第一人者であることを知り、一縷（いちる）の望みを持って喉頭全摘術を受け、その1カ月半後、気管食道シャント法を受けた。

■喉頭全摘出手術と気管食道シャント法



気管食道シャント法は、声帯の代わりに食道を利用して発声する方法だ。話したいときには、永久気管孔（右）を指で閉じると、ボイスプロテーゼを通じて空気が食道側に流れ込む

喉頭を全摘しても声を温存できる治療法

喉頭全摘術では、気管と食道を完全に分離し、のどに永久気管孔をつくる。その後に、気管と食道をシリコン製の管（ボイスプロテーゼ）でつなぐのが、気管食道シャント法（イラスト参照）だ。全摘術で開けたのどの永久気管孔には、鼻の役割をする開閉できるフィルター付きの蓋を装着する。話すときには指などで蓋を閉じると、気管の空気がボイスプロテーゼへ流れ、食道側に付いた一方通行の弁が開く。すると肺からの空気が食道側に流れ、声を出すことができる。気管孔の蓋を開けると食道側の弁は閉じ、飲食物が食道を通過するという仕組みだ。

従来は喉頭摘出をした人は、のみ込んだ空気を食道にためてげっぷの原理を使って発声する食道発声法や、のどにひげ剃り機のような器具をあてる電気式人工喉頭で声を出していた。

しかし、食道発声法は習得が難しく、日常生活を送るのに満足な発声ができる人は約1割ともいわれる。電気式人工喉頭もロボットのような機械的な発声しかできない。しかし、シャント法では9割の人が比較的平易に、日常に支障のない発声ができる。三橋さんは手術後ほぼ普通に話せるようになり、現在も営業マンとして仕事に励んでいる。

「三橋さんのように社会復帰を果たしたい方や、年齢の若い方にとっては、メリットのある手術です」（福島医師）

喉頭摘出をしなければならない患者は、喉頭がんのみならず下咽頭がん、頸部食道がんにも及ぶが、気管食道シャント法はそれらの人々にも適応が可能だ。

元衆議院議員の与謝野馨さんも福島医師のもとでこの手術を受けて声を取り戻した一人だ。

「与謝野さんは、下咽頭がんで、当初、他の病院で亜

喉頭がんデータ

推定患者数	約4000人／年
かかりやすい性別	男性10：女性1 ※90%以上が喫煙者
かかりやすい年代	60歳以上
主な診療科	・頭頸部外科 ・耳鼻咽喉科
主な症状	
声のかすれ	
主な治療法	
・初期がん：放射線治療、部分切除（内視鏡手術も） ・進行がん：喉頭全摘出手術、化学放射線療法	

イラスト／今﨑和広

全摘術を受けましたが、誤嚥性肺炎を繰り返し、結局全摘術を受けたため、声を失い政界を退くことになりました。ところがシャント法の存在を知り、私のところを訪れました。そして、シャント法によって話せるようになり、現在はテレビ出演もされています」(同)

気管食道シャント法によるボイスプロテーゼ挿入は、欧米では標準的な治療法として喉摘者（喉頭を摘出した人）の約7割が受けている。ところが、日本では保険適用で治療が受けられるにもかかわらず、まだ5％程度の普及率で、喉頭がん患者でもこの治療法を知らない人が多い。

「喉頭がんなどを専門的に診る頭頸部がん専門医が少なく、がんの治療に手いっぱいで患者さんのQOL（生活の質）にまで手が回らず、シャント法を実施できる医師は極めて少ないのです。また、喉頭摘出者を援助する言語聴覚士でも、この治療法を認識していない人も多いのが現状です」

そう話す福島医師は、現在、複数の大学病院などでシャント法の指導にあたり、前出の齋藤医師などとともに医師や言語聴覚士向けの講習会などを開催し、シャント法の普及に努めている。

〝声か命か〟の選択だった喉頭がん患者にとって〝声も命も〟残す治療がようやく普及しつつある。これから治療を受ける人やその家族にとっても安心材料となることは確かだ。

一方、「早期発見や予防に努めて、喉頭を失わずにすむためのがん啓発も大切だ」と齋藤医師は話す。

「声のかすれなど自覚症状が出たら、速やかに耳鼻咽喉科を受診してください。声帯白斑症という前がん状態などで発見されれば、経過観察や早めの治療で声を失わずにすみます」

喫煙や飲酒の習慣がある人は、日頃から注意するべきだ。**ライター・伊波達也**

セカンドオピニオン

声を取り戻す喜びを喉摘者に伝えたい

気管食道シャント法の普及に尽力する喉摘者の患者会「悠声会」幹事の土田義男さんに、気管食道シャント法の現状と今後の展望について聞いた。

喉頭摘出で声を失うことは、本人もさることながら、奥さんをはじめご家族がまいってしまいます。

私は2003年、下咽頭がんで喉頭摘出を受け、その後、06年に気管食道シャント法によりプロヴォックスというボイスプロテーゼを挿入しました。それまでうまく声を出せずに困っていたのが、シャント法の手術後はすぐに話せるようになりました。この喜びを喉摘者とそのご家族の皆さんに少しでも知ってもらいたいと考え、悠声会を立ち上げました。

プロヴォックスによる発声法は、話せることのみならず、肺の空気を口や鼻から出せるため、歌を歌ったり、息を吹きかけたり、はなをかんだり、辛いものにツーンときたり、香りを嗅いだりという多くの楽しみを失わずにすみます。1日2～3回の専用ブラシによる掃除と定期的な手入れなどが必要ですが、慣れてしまえば大丈夫です。

NPO法人　悠声会
会長
土田義男（つちだよしお）さん

課題は治療費でした。日本では、現在使われていない製品に合わせて金額が決められていたため、ボイスプロテーゼの保険適用額が低く抑えられていました。しかし、14年4月から従来の3倍近い2万8100円まで保険が認められ、治療現場では、現行のプロヴォックスを使用しやすくなったと思います。

また、プロヴォックスは平均して約3カ月に一度交換する必要がありますが、これは外来診療で保険が認められます。しかし、日常的に使うメンテナンスの器具ほか付属物はまだ自己負担で月に2万円ほどかかります。これについては、悠声会の働きかけにより、公費助成の対象となる市区町村が増えてきています。

とはいえ、まだシャント法をできる医師が少ないこともあり、医師からシャント法を選択肢として必ず伝えてもらえる状況にはありません。

私たちはさらなる治療費の負担軽減を目指して活動を続けると同時に、シャント法の情報を広く伝えることで、喉摘者の心の支えになっていきたいと考えています。

悠声会ホームページ
http://www.yousay-kai.org

週刊朝日MOOK
手術数でわかる いい病院2014
全国5693病院手術数一挙公開　好評発売中　定価714円(税別)

◎次回は「大人の歯科矯正」です。予定は変更する場合があります。●本欄あてに、いろいろな病気についての質問や闘病体験を、手紙、電子メール(wab@asahi.com)またはFAX(03－3542－1991)でお寄せください。